

説明 (2分59秒)

#### 1 枚目

本研究では、WHO-DAS2.0 を用いた障がい福祉サービスに従事する職員のための研修プログラムの開発を目的にしています。主著者は松本将八で、共著者は筒井と木下です。

#### 2 枚目

これまでの研究で、すでに WHO-DAS2.0 を使用し、障がい者の状態像をレーダーチャート上に「見える化」が出来るようになってきました。そこで本研究では、この成果を用いて、さらに障害者固有の特性別の支援計画を作成するためのガイドラインやマニュアルを開発することを目的としました。

#### 3 枚目

本発表では、まず、WHO-DAS2.0 を構成する項目の中で、現場の職員にとっては、どの項目の解釈が難しいかを調べた結果を示します。そして、それでも、すでに職員らが、有益な情報が得られることから、支援計画に参考になっている項目があることについて報告します。

#### 4 枚目

図表 4 をご覧ください。青色の折れ線グラフは、WHO-DAS2.0 の質問の中で解釈が難しくないと回答された項目を示しています。また、赤色の折れ線グラフは、すでに個別支援計画に参考していると回答された項目を示しています。これらの結果からは、例えば、領域①の赤の矢印で示された「新しい課題を学ぶ」は、個別支援計画書に参考にしたいが、その評価の判断には不安があるという項目であったことを示しています。

#### 5 枚目

図表 5 は、精神障がいと知的障がいの方々のどちらも参考にした項目には違いがなかったことを示しています。一方、図表 6 では、項目 1 の 5 (人々が言っていることが何かを普通に理解する) のように、障がい軽度の方のほうが支援計画書の参考になっていることを示していました。

#### 6 枚目

現在、WHO-DAS2.0 を利用している職員にとっては、領域①の「新しい課題を学ぶ」の項目のように、評価基準を理解していないため、判断に不安があり、個別計画に反映できないことがあることがわかりました。このことから、マニュアルを作成して、判断の不安をなくすことが重要と考えます。

次に、領域②の「あなたの家の中で移動しますか」という項目は、職員は利用者の家庭での活動を十分に把握できていないため、判断が難しく、計画には参考にできないとされてきた項目でしたが、この情報を正確に収集できれば、居宅介護等のサービス提供には有用な情報となるし、こういった情報を使えるようになることは、よりよい支援計画の作成ができるようになると考えられました。このため、この情報を使えるようになるための項目の正しい評価のためのガイドラインの作成を検討したいと考えています。

さらに、障がいの程度によって、個別支援計画書に反映できる項目には、違いもみられました。これらの情報を整理し、個別支援計画書に関する WHO-DAS 利用マニュアルの作成を検討することは、今後の課題と考えます。

以上の結果から、現行のガイドラインやマニュアルを改定し、研修プログラムを構築できれば、多くの障がい福祉従事者のための教育ツールとなるのではないかと期待しています。